

客まちの人力車が昭和のはじめごろまで見られました。

釜子にも人力引きがいて、急用のお客さんを運ぶのに3人引きといって、つな引き、かじとり、後おしで走ったこともあったそうです。

大正のころになってのり合馬車が走るようになり、人力車はだんだんすがたをけしてきました。

乗合馬車は白河一石川間と白河一たなくら間を大正7年（1918）から12年まで走りました。どちらも1日1往復でていりゅう所などはなく、どこでもお客様をのせました。

この乗合馬車には1頭立てと2頭立てがあり、1頭立てには6人、2頭立てには12人のせることができました。ぎょ者がぶらくに入ると「とうていとうてい」とラッパをふきならして通りすぎたので「とて馬車」とよばれています。大黒町の安沢そうたろうさんは馬車2台をおいて、釜子一白河間を走らせていました。

そのころの大黒町を通るいばらぎ街道は、米や炭、木材などをつんだ荷馬車の往来も多かったようです。

大正の終わりごろからは自動車、昭和になってからは乗合自動車も走るようになって、これらが人力車や乗合馬車にかわる交通きかんとなつたのです。

また自転車は釜子や小野田などで明治38年（1905）ころはじめて走るのが見られました。しかしそれも数えるくらいの人で、めずらしがられたそうです。自転車は今のように家のにわなどにはおかないので、ろうかやおかげなどにあげておいたそうです。



人力車